目　次

序　章

1　本書のコンセプト　1
2　コンセプトの前提にある「植民地」という視点　2
3　入植者植民地主義と和人のアンビバレントな立ち位置　4
4　矢臼別闘争への着目　6

第Ⅰ部　入植者と植民地主義の再考

第1章　戦後開拓　9

1　戦後開拓の経緯　9
2　北海道と「開拓」をめぐるこれまでの見方　10
3　戦後開拓地・旧三股（みまつか）を問う視点　11
4　旧三股の成り立ち　12
5　旧三股での暮らし、そして用地買収　14
6　改めて、戦後開拓の苦労の意味　16

第2章　アイヌ民族と朝鮮人のつながり　18
——先住民支配と植民地支配が交錯する北海道

1　北海道の「開拓」と天草　18
2　アイヌ民族と朝鮮人のつながり　20
3　戦後の無縁碑をめぐる記憶の闘争　22
4　アイヌ遺骨盗掘と「ウポポイ」　23
5　在日ヘイトの現在　25
6　むすびにかえて　26

第3章　ウィルタから見る北海道、そして日本　28

1　はじめに　28
2　２人の兄妹の足跡　30
3　国が行うべきこと　33
4　おわりに—私たちにできる最初の一歩とは　36

第4章　北海道開拓とキリスト教　38
1　はじめに　38
2　キリスト教植民の背景　38
3　主なキリスト教植民のケース　40
4　入植の歴史とどう向き合うか　44

第5章　旧優生保護法のもとの差別と北海道　47
1　優生保護法の成立と時代背景　47
2　不妊手術の対象の拡大と手術の推進　48
3　不妊手術の実施状況　49
4　優生思想の普及・浸透　50
5　優生保護法の改正と被害の放置　52
6　立ち上がった被害者たち　52
7　裁判闘争　53
8　優生保護法はいまに続く問題　55

コラム①　痛みの声を聴き、社会に対する見方を刷新する　57
コラム②　破壊された知床、よみがえる知床　59
——「しれとこ100平方メートル運動」が問いかけること

第Ⅱ部　平和的生存権の新たな連帯——矢臼別の現場から

第6章　矢臼別闘争の歴史　63
1　生活空間から「軍事化」を問う　63
2　冷戦下の境界地域としての道東　64
3　矢臼別演習場反対闘争の始まり　65
4　R-30ロケット実射阻止闘争と核戦争への恐怖　67
5　地域社会の生活空間をめぐる反基地闘争　69
6　自衛隊・米軍のグローバルな戦争、
地域社会に根ざした平和運動へ　71

第7章　矢臼別闘争を支える平和的生存権　72
1　矢臼別で日本国憲法に迎えられる　72
2　憲法と平和主義　74
3　北海道と平和的生存権　75

4　非暴力的なコミュニティをつくる矢臼別闘争　77
5　しなやかな闘い―権利と自由を保持する義務の実践　79

第8章　平和への思い　81
――伊江島から移住し矢臼別闘争にかかわる上出雅彦さん
1　伊江島で生まれて―父の沖縄戦体験　81
2　子どもの頃―米軍の激しい射撃演習　83
3　青年時代―定時制高校、東京労働学校での学び　83
4　別海の農業実習へ―そして矢臼別との出会い　85
5　マイペース酪農への転換　86
6　根底でつながる、命と平和への思い　88

コラム③　矢臼別平和公園 91

第Ⅲ部　日常生活における暴力と平和のつながり

第9章　若者を取り巻く暴力　94
――ジェンダー問題と貧困
1　暴力は貧困から生まれるのか　94
2　３日に１人が殺されかけている!?　94
3　見えるようで見えない暴力　97
4　暴力の再生産への抵抗　100
5　貧困も構造的な暴力の１つ　103

第10章　生活保護の課題と自立支援　106
――「釧路モデル」を事例として
1　生活保護制度の役割と目的　106
2　自立支援プログラムの構想・導入の背景　107
3　自立支援プログラムの特徴　108
4　自立支援プログラムの先進自治体・釧路市の実践　109
5　誰もが自立と尊厳を確保される地域づくりへ　113

第11章　北海道の暮らしと外国籍の住民　115
1　労働力として求められる外国人　115
2　移住労働者の受け入れと定着　116

3　人の移動と北海道　117
4　住民のグローバル化　121

第12章　大学は軍事とどのように向き合うべきか　124
1　教育の目的と平和　124
2　安全保障技術研究推進制度　125
3　大学は軍事研究とどのように向き合ってきたか　128
4　学問の自由と軍事研究　130
5　大学教育の課題　131

第13章　メディアと平和　134
1　メディアがめざす「平和」とは　134
2　警察によるヤジ排除が奪うもの　135
3　マイノリティの視点から考える　138
4　若い人たちへ　141

コラム④　杉田水脈氏の人権侵犯問題　144

終　章　北海道の現代史をひらく教育への示唆　146
1　生（せい）の現場と乖離したイメージ　146
2　日本人あるいは和人の無自覚性・加害性　147
3　ひらかれた自立と、消えない歴史　148
4　一人ひとりの勇気　150